

41502

教科書文庫

4
810
41-1918
200030
1533

717
1918

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM. Kodak

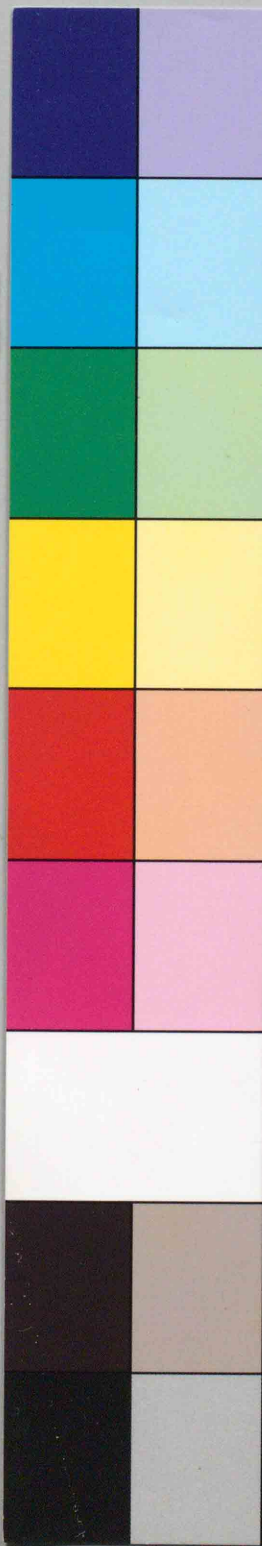
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM. Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



3159
Sa19
資料室

訂修新撰國語讀本 佐々政一編 卷四



資料室 395.9
日六十月一年七正大
濟定檢省部文 5019
用科語國校學中

文學博士佐々政一編

訂修
新撰
國語讀本



株式會社
明治書院



訂修
新撰國語讀本卷四目次

一	佛濱の月夜……………	一
二	碓氷の汽車……………	六
三	麥藁帽子の傳……………	一一
四	朝の村……………	一六
五	學問の趣味……………	一七
六	歐米人の氣風……………	二三
七	史前の人類上……………	三〇
八	史前の人類中……………	三四

目次

九	史前の人類 下	三八
一〇	晩 秋	四一
一	野 路	四一
二	月を帯ぶる白菊	四二
三	秋 郊	四三
四	富士雪を帯ぶ	四四
一一	眞田大助	四六
一二	蘇 武	五二
一三	果 物	五八
一四	アルプ山越 上	六三
一五	アルプ山越 中	七〇

一六	アルプ山越 下	七四
一七	辛抱くらべ	八〇
一八	學藝に志す者の誠	八七
一九	水の力	九〇
二〇	ナイヤガラの瀑	九二
二一	嫩草山	九九
二二	公子の躰方を申し遣す	一〇四
二三	運 命 上	一〇八
二四	運 命 下	一一六
二五	驚 異	一二一
二六	ことば	一二五

二七 門生に諭す……………一二九

二八 服従と獨立……………一三三

二九 意志の力……………一四一

修訂新撰國語讀本卷四目次終



修訂新撰國語讀本卷四

一 佛濱の月夜

今年九月十一日、陰曆八月望日に當りければ、こよひの名月海邊にて眺めばやとて、犬吠が崎のあたりさして都を出でぬ。

本所より千葉佐倉などを経て、松岸にて汽車を下り、銚子の市街を過ぎて、町はづれなる川口神社の丘に登る。ここは大利根の海に注ぐ處なり。川の幅いと

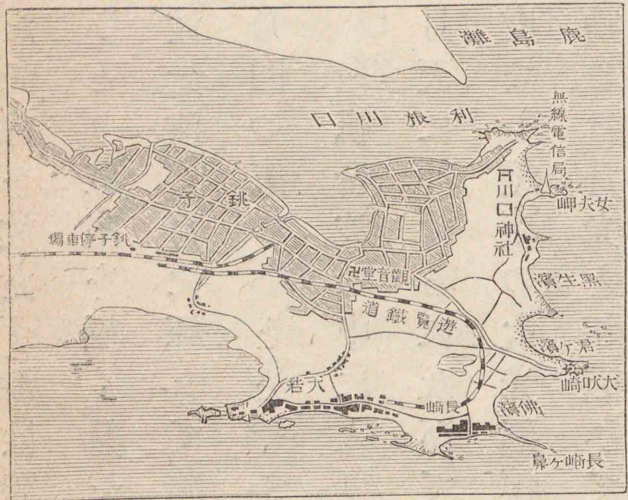
廣く、對岸に寸馬往き、豆人來る。左に銚子の瓦鱗を見渡し、右に鹿島の荒灘を望む。白帆遠く風を孕み、櫓聲近く咿軋として聞ゆ。

祠の後より高原を横ぎりて黒生濱に下り、磯づたひに君が濱を経て犬吠が崎に登り、地藏阪を下りて佛濱に至れば、日ははや西に沈みぬ。此處に海水浴の旅館二つあり。曉雞館と云ひ、水明樓と云ふ。犬吠が崎を左にし、長崎が鼻を右にせる、一曲の海濱の長さ十町ばかりの間、旅館より外には家なく、後には小松生ひ續きたる高阜を負ひ、前は直に俯して海波に臨み、

自ら別天地を爲せり。水明樓に投ず。

浴後、欄によりて海上を見渡すに、萬里渺として雲

なく、暮色やうやう波聲を罩めたれど、日は未だ全く暮れず。犬吠が崎の燈臺も未だ點火せざれば、月の出づるには猶程あらんとて、眼を座に移ししが、ふと東の方を見れば、團團たる明月いつしか海を離れたり。離るること數尺、未



だ光線を放たず。海は碧に、空は青し、水天蒼茫の間、月ひとり紅玉を懸く。月やうやく上りて漸く小となり、波光遠く月に輝きて、萬里金沙を散し、沖に釣する漁舟四つ五つ、いとさやかに見ゆ。

白帆金波の中に入りて、忽ち見え過ぎてまた消ゆ。月、天に沖するに及びて、流光際なく、帆影また隠るる處なし。燈臺の火光廻轉する毎に、西に明かに、東に消ゆるは、月光と相闘ひてその光を失へるなり。満潮の刻は過ぎたれども、濤はなほ磯に高く、海風は軒近き岸の姫松に謾謾の音をなせども、流石に枝上幾百顆

の月影をこはさず。濤にまぎれざる松蟲、鈴蟲、蟋蟀の聲聲、殊に秋氣を添へて冷かなり。

起ちて濱邊に下る。巖礁の散布せるあたりを、濤と路を争ひつつ、犬吠が崎を後にして、飄然として歩すれば、月はわが顔を照し、風はわが袂を翻す。右は松丘自然の屏障を作り、左は大洋渺茫として、其の際を知らず。水陸の間ただ我が身一つを點ぜり。顧みれば旅館影を没して、樓上の燈光星よりも瘦せたり。

(大町桂月)

二 碓氷の汽車

拜啓。本日午前七時二十五分松井田發の下り列車は、幾多の紅葉觀客を載せて碓氷に向ひ候。小生は無論その一人、一樹一枝も見落すまじと、眼鏡のくもり押拭ひて、左手の窓より眺め續け候。妙義の麓近く過ぐるとて眺め候へば、豫ては骨ばかりの様なる武骨千萬たる妙義まで、秋にそそのかさされて色めかしき錦を着飾り居り候。列車頓て横川を過ぎて、漸く山深く分入れば、所謂碓氷の紅葉は其處に始まり候。

上野國碓氷郡にあり、信越線の一驛。

上野碓氷郡、碓氷峠の東麓、碓氷川の北岸。碓氷の關址あり。

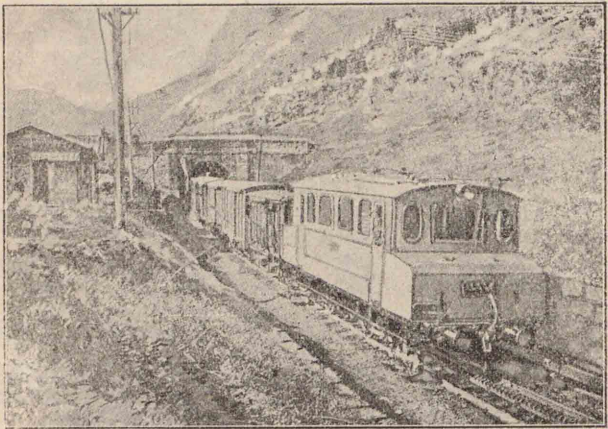
碓氷の紅葉と申候は、横川を距る一里の所より、輕井澤に達する半道ばかりの手前まで、汽車の路にて一寸二里足らず、歩道にて三里ばかりの間にこれあり、この三里ばかりの間は、峯といふ峯、巒といふ巒、前も後も、仰ぐも俯すも皆紅葉に御座候。紅葉と申候はんは聊か實を失し候はんか。仔細は、碓氷三里誠に楓樹多く候へども、獨りこれのみならず、松柏など若干の常磐木を除くの外、樺、榛、しべ、野生の柿、櫟、櫻を始とし、この山に生ふる木といふ木は皆風露に染められて、或

は黄となり、或は紅となり、淡紅となり、茜となり、褐色となり、鳶色となり、焦茶色となり、上に下に、横に豎に、岩の上、水の邊、一言に申候へば、滿山に滿渡り候より、山又山は宛ら、五色百色錯綜して織出したる錦繡に包まれたるが如くに相成り候ものにて、かくの如き場所は音に一箇處のみに止まらず、大凡、碓氷嶺の東面は、谷又谷、峯又峯、殆ど斯くならざるはなしとも申すべく候。

されば何れの道より上り、もしくは下り候とも、眼を塞ぎて通らざる限は、紅葉は自然過客の

(一) 信州北佐久郡、長野市の東南約二十里。海拔三二〇〇尺の高原にあり。

(二) Abt. 齒軌條といふ軌條を附加せる鐵道の名稱。



道鐵式トアア

眼に入らざるを得ざる次第に候へども、尤も宜

しき見様は、往きには汽車にて賞しつつ、輕井澤に到り、歸りには徒歩舊道を傳ひて、かつ眺めかつ下るにこれあり候。下りの眺は申す迄もなく、上りとても御存じの通り、横川より輕井澤迄は、アプト式鐵道を用ひ

十五分の一の急勾配にて、アプト式鐵道を用ひ

(→) Tunnel.

たれば、汽車は三里餘の所を一時間もかかりて上り候間、汽車の窓より十分眺め候餘裕これあり、隧道二十六の多きに及び候へども、黑暗の中より忽ち紅葉の眩きに出づるなど、變化の妙却て面白きものありて、四里餘の阪道を喘ぎつつ上るには遙かにまさり候。

嬉しきは天氣の事に候。この日小春の好天氣にて、小生は行く行く、朝日を受けて一倍の色添へたる、錦繡の屏風の如き山を見つつ上り候。紅葉は今が盛りに御座候。行く行く満山の景色を

賞しつつ、九時少し過ぎ輕井澤に着して汽車を下り候へば、淺間おろし颯と面を吹いて寒さ膚に徹し候。匆匆不宣。(徳富蘆花「青蘆集」)

三 麥藁帽子の傳

麥藁帽子はいつこの産ならんか詳かならず、すぐれたるふしは無けれど、虚心にして眞率なるが故に、老いたるも若きも親しまぬものなし。

その遠祖は保食神(ウケモチノカミ)より出でて、由あるものの末なれど、中頃大いに衰へたりしに、白河院の御時、某とい

(二) 豊宇氣神をいふ。火産靈神の御子にて、五穀を始め種種の物を産み出でて給ひし大神。

清盛の父(一五六一)
一八三

ふ者、祇園の社の下司の僧につきて、神事に仕へ奉り、心はまめながら、貌のいとおそろしげなりければ、平忠盛大雨なる夜に行きあひて、鬼ならんと思ひひがめて捕へたれど、院は供神怠りなき者の由聞しめして、却て御感をたまひぬ。これより麥藁氏の名始めて顯る。

その裔某、元弘の亂に楠公に従ひて義兵を擧げ、赤阪城をまもりぬ。北條が將名越、越前守攻むること急にして、城危かりければ、一族どもをかたらひ、甲冑かひがひしくよろひ、打物とりて、夜中ばかり竊かに城

外に出でて疑兵をはりしかば、越前が手の者、皆恐れて近づく者なかりき。その武略も思ひやらる。かくて南風競はず、武家再び榮ゆる世となりし後は、世を憤り、山野にかくれて出でず。徳川將軍繁盛の頃、武藏の國大森の里に住めるもの、僅かに技藝を以て知られたるのみなりき。維新の後、南朝勤王の士多く顯位追褒を蒙りしによりて、麥藁氏も再び民間より擧げられ、帽子の爵たまはりて、人の頭にたつ身とはなりぬ。されどこれをもて誇らんともせず、招くものあれば、貴賤・貧富を論ぜず喜びて往く。最も書生を愛してこ

(一) Handkerchief. (二) Morning-coat.
(三) Cigarette.

れと親しみ、毎に曰ふ、「少年は國家の元氣なり、これを庇蔭するは余の任なり」と。出でて行くには必ず伴はる。破れたる衣装と並びて恥かしくとも思はず。己とも舊交あり。或日その居を訪ひしに、卒然として語りて曰く、「凡そ國家は儉に興りて奢に亡ぶといふなるに、この二三年のほど、世の中次第に華奢に流るるこそ歎かほしけれ。余が年頃思ひたのみたりし少年書生輩までも、もとの短衣敝袴をすててモートニングコートとなし、高足駄は佛蘭西革の靴とかはり、手には絹製のハンカチーフを握りて、口にはシガレ

(四) Panama

ットを啣む。身のまはり華やかにのみなり行くにつけては、おのれをも疎ましきものになして、舶來のパナマを喜べり。華奢は文明に伴ふ習とはいへ、かくのみ進み行かんには、國家經濟の前途今更に思ひやらるるよ」と、頻に慷慨せり。老いて尙盛なりと謂ふべし。後又訪ふに、秋風立ちし頃出でて、行きし所を知らずといふ。蓋し時を憤りて跡を韜まししならん。或人のいへる、「屑屋の市に隠る」と。孰れか信なるを知らず。

(萩野由之)

四 朝の村

朝の香高き岡に立ちて、
どよめく村の聲聞けば、
むかしの我に歸るかな。

紅葉につつむ柴の戸の
中よりひびく箴の聲、

朝焼うつる里川の
末にはめぐる水車。

鍛冶の鎚にまじりつつ、
騎兵の蹄とどろくよ。

黍つむ車入りはてて、
森より起る銃の音。

賑はしきかな、朝の聲。

豊かなるかな、朝の村。

ああ古郷もかくありし。(尾上柴舟―銀鈴)

五 學問の趣味

藝術を賞翫することは、素より専門家に限つたこ
とではない、寧ろ其の賞翫は一般素人のことである。
深く學問を研究して、其の蘊奥を極めることは、固よ

*Authority.

り學者に屬することであるが、趣味として之を賞翫するは、同じく一般素人のことである。然るに日本人は概して、書畫・骨董を愛玩する心はなかなか深いが、學問に對する趣味はあまりに乏しい。西洋人は固より各種の美術を愛翫するが、又學問に對しても頗る深い興味を持つてゐる。或は實業家にして博物學に興味を有して、立派な著述をする者もあるし、或は外交官にして歴史・地理・言語・博物等に興味を有して、其の任地に於けるこれ等の事項を研究し、本國に歸つては、それ等に關する一廉のオーソリテイとなる者

も少なくはない。之に反して、日本人の間には、専門の學者以外に學術的研究をしてゐる者は殆どないといつてもよい。もし専門の業務以外に多少の趣味ありといふならば、それは書畫・骨董・音樂等、藝術上の趣味に限られて居る。

専門家にあらずして學問を楽しむといふが如きは、一種の道樂に過ぎないのであるから、此の道樂がないからと云つて、固より咎め立てをすることは出来ない。併しながら斯かる道樂は誠にあつて欲しいものと思ふし、また此の種の道樂がない結果として、

日本の學問の進歩に影響を及ぼす事がないとはいへない。素人に學問を賞翫する風があると、自ら學者の事業を諒解し、之に對する同情が湧出る。大美術家が世に出たり、美術が盛になつたりするのは、之を保護したり賞翫したりする者の多いのに因るので、學問を樂しむ者が世間に多ければ、それだけ學問の進歩を促す事になる。日本に於ける學問の進歩の顯著でないのは、單に學者の努力が足りないのみでなく、素人の間に學問を樂しむ風がないのにも因ると思ふ。近年我が美術の發達せるは、相當の保護者が出て

來た事に因るのであつて、而も其の保護者は之を美術の賞翫者の間に見出すのである。學問の賞翫者が多くなつて、之を保護する様になつたならば、其の進歩には著しいものがあるであらう。

學問の進歩は、學科によつては、設備・機械等に関係あるが爲に費用を要することが多い。若し篤學の人を保護するものがあれば、其の學問の進歩を促すことも隨つて頗る大いなるものである。西洋には美術家を保護する者があると同時に、學者を保護するものも少なくない。かくて彼に於ては學問は益、進歩す

る。されば學問を賞翫するといふ道樂は、其の影響する所、頗る大いなるものがあると云へる。

學問を樂しむ風のないのは、單に學問の進歩のため、に遺憾であるのみならず、社會の風尚を高める上にも残念な事である。我が社會に幾多道德・風紀上の缺點あるが如き、茲にも原因が伏在する。又前に述べた、實際家にして著述をなす者のないといふが如き、實は學問に興味を有せざる所より起る。かかる人は長く實地の業に従事して居つても、只、年年歳歳同一の事を繰返して、其の間に知らず識らず熟練を積む

と云ふまでであつて、或は自ら考へたり、或は書物に諮つたり、或は人に尋ねたりする事をしない。それ故に學問に興味のない人は、何年同じ事をして居つても、進歩・發達の機會を捉へ得ない。即ち學問鑑賞の習慣なきは、常に他人を益せざるのみならず、自身も損する所が少なくないといはねばならぬ。

(澤柳政太郎―隨感隨想)

六 歐米人の氣風

國民にして元氣なくんばいかに、自重心なくんば

(←) Deutschland.

(=) Berlin.

いかに、品格なくんばいかに。その國の前途必ず大いに憂ふべきものあらん。

今、歐米各國人の氣風をみるにドイツにては、大ドイツといふ觀念、國民の間に充ち満ちて、その元氣實に當るべからざるものあり。現に地圖などにも、ドイツ語を用ふる他の人種の住地までをも、將來のドイツ國として彩色したるがあり。ベルリン市街の繪端書には、「世界の大都市」と記したるをも見たり。又海上においては、必ずイギリスに打勝たざるべからずとて、盛に海事思想を鼓吹し、軍港を開き、軍艦を建造せ

(三) London.

(四) Paris.

り。殊にベルリンをして世界のベルリンたらしめんとする經營に至りては、實に苦心を極めたるものにして、三四十年前まではまことに小さき町なりしが、今日にては、その市民の誇稱するが如く、世界における有數の都市となれり。就中その道路の清潔にして美麗なる、その建物の宏壯にして整備したる、殆どロンドン・パリをして後に瞠若たらしむ。

イギリス人は自尊心強く、自負心に富み、品物にてイギリス製なるが故に良しとて誇稱するを常とせるが、實際、英國製の品物の堅實なるを見れば、おの

づからその國民の性格も察せらるるなり。元來、他國よりも早く開けたる爲に、世界の富を集めたる結果、ひとり物貨の輻輳するのみにあらず、繪畫・古器物の類に至るまで、世界各國の粹を自國にて見得るを以て、おのづから世界を打つて一丸となす氣風あるが如し。或人イギリス人の長所を語りて、英人は血色美しく、信賴すべき堅實なる性質を有し、風俗すなほに、秩序よく立てり。その社會の整頓したることは世界第一なり。そは譬へば、その國に産する馬・犬・羊などの動物の、他國のものとは格別に優良なるに似たり。」と

いへり。

*大學に就學すること能はざる人の爲に催す高等學術講義。

「われはわが運命の開拓者なり。」とは、イギリス人の、固く信ずるところなり。されば一般に向上心に富みて、商家の番頭、鑛山の坑夫までも、大學普及講義に出席する爲に、その日の業務を終へてより、二里も三里も往復するが多し。かく小成に安んぜず、自家の修養に怠らざるが故に、品性の下劣なる者漸く減少す。ある貴族は常に下等汽車にて旅行してはく、わが國にては、下等車に乗る程の者も、皆紳士として恥かしからぬ人のみなり。されば上等車などは寧ろ廢する

に如かず」といへりと聞く。自營獨立の氣風が、人の品格の上におよぼす影響、以て推すべきなり。

アメリカ人は如何と見るに、レコード破りを以て自ら任じ、何事にもあれ、これを決行せんと、の元氣常に横溢せり。すべての事業の規模の宏大なる、新奇を競ひて突進する點は、他に比類なしといふべし。曩にフルトン・ハドソンの祭ありし際に、國內の軍艦集合を行ひしが、その櫓を悉く櫓形に改めたりといふ。これら突飛なる行爲は實に米人の特色なり。かのローズヴェルトの行動に見よ、大統領を辭すれば遠く

(一) Record.

米人、始めて蒸氣船を作る。

(二) Fulton. (1765—1815)

英人、名高き航海家。

(三) Hudson. (—1611)

西曆一九〇九年まで、大統領たりき。

(四) Roosevelt.

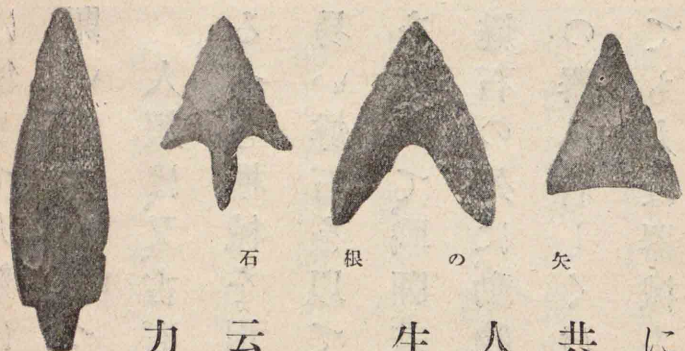
アフリカの内地に猛虎を狩り、歸り來れば更に英國の大學にゆきて講話するなど、進取敢爲の氣象、常に鬱勃たるものあるにあらずや。

よりて思ふ、常に國民の元氣を振興して倦ましめざるは、國運の發展を圖るうへに極めて必要なることを。石橋をたたきて渡る用心はもとよりさることなれども、強き自信を以て立ち、仆るるまでは走るといふ元氣亦無かるべからず。渚水は腐敗し、進まざるものは必ず後る。進歩主義は有爲なる國民の必ず忘るべからざる要訣なり。(床次竹二郎「歐米小觀」に據る)

七 史前の人類上

歴史の始まる前の人類も、歴史の後の人類も、人類たる靈能は同じであつた。人類は其の形を地上に現した當初から、萬物の靈長たる神威を具へて居た。彼等は自然の壓力に對して頗る勇悍なる抵抗を示した。世界の氣候も光景も今日と全く違ひ、今は其の種類の全滅した動物が、なほ地上に彷徨して居た時にも、人類は既に存してゐた。さうして他の動物が地氣天候の虐待に堪へず、影を地上に没した後も、人類だ

(⇒) Mammoth. (←) Paleolithic age.



石 根 の 矢

けは其の存在を續けた。人類學者の所謂古石器時代に、人類が今は既に亡び盡した動物と共に住んで居た。歐洲では、此の時代の人類は巨象・穴熊・野馬・馴鹿などと共に生活してゐた。

人類は、地上に現れた時から、言語と云ふ、他の動物のもつて居ない、最も有力な交通機關をもつて居つた。言語は、恐らくは、人類の間に生れた、最初のしかも最大の發明であらう。之

に依りて、人類は動物の状態から解脱し得べき道を開いた。之に依つて共同生活は始まつた。

人類は、又、古石器時代に於て、既に手足の用に代へるべき機械を用ふることを知つて居た。彼等は碎け易い燧石を以て、簡単な器具を作つた。所謂矢の根石を作つて、戦闘若しくは狩獵に従事した。時としては、燧石の外に、動物の骨角牙その外の物質を以て、平和の器具、若しくは武器を作つた。彼等は、此の時代に於ても、人は器械を用ふる動物たることを自證した。

而して又、當初から、動物を飼馴して、自己の使役に

供すべき活動を始めた。古石器時代に於ても、犬と馴鹿とは既に家畜として人類の伴侶になつた。斯うして自然界の征服は先づ動物界から始まつた。

されば人類の最初の生活は、狩獵と漁業とであつた。古石器時代の人類は獵師若しくは漁夫であつた。而して普通、土を穿つた穴又は岩窟に住んでゐたが、或地方では泥又は蘆で造つた小屋に住んだ痕迹もある。加之、彼等は已に生きる爲にのみ働く單純なる動物では無かつた。彼等は此の時代に於ても、生活以上の高い趣味を持つてゐた。彼等は骨や象牙に物の

形を彫刻した。彼等の彫刻した物體は主として動物の形であつた。馴鹿を刻んだのもある、巨象を刻んだのもある。藝術は遠く開闢時代から起つた。

八 史前の人類 中

駭駭として進んで已まない人類の進歩、人心の開發は、古石器時代の末に、驚天動地の大發明を生んだ。この大發明は、言語の發生のやうに自然的に、さうして徐徐として完成したものでは無^い。忽に生れて、忽に世界の光景に大いなる變化を與へたものであつ

(一) Clan.
(二) Tribe.

た。それは外でもない、即ち木燧を以て火を造ることの發明であつた。此の發明と共に、古石器時代は去つて新石器時代が來た。

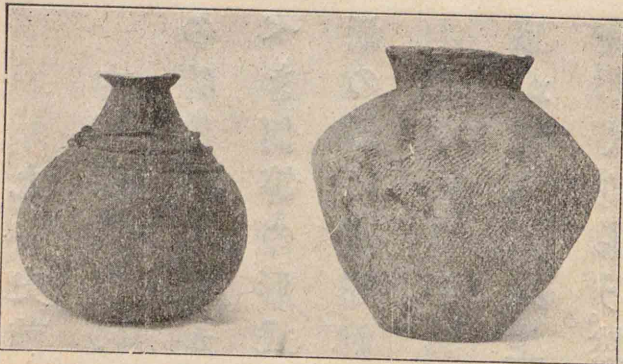
古石器時代から始まつた、野獸を征服して家畜とする運動は、益、その歩を進め、牛も馬も羊も雞も、此の時代に於て野性を失つて、家畜になつた。これが爲に、獵夫の多數は變じて牧者になつた。

新石器時代に於ても、人類の多數は牧者であつたから、依然として漂泊の生活を營んで居た。族若しくは種族として、水草を逐つて地上を徘徊するのが、彼

等の生活状態であつた。

さりながら斯うした漂泊の生活の間にも、彼等の進歩は止まなかつた。彼等は動物界を征服して家畜に化せしめたと同じ手段で、植物界を征服して人間に隸屬せしむべき運動を始めた。彼等の努力に因り、野草は化して小麥・大麥・燕麥・米になつた、多くの蔬菜は出來た。人類は始めて土地を利用し、家を建て、土城を造つて、土着の生活を營んだ。

又古石器時代には見ることを得なかつた陶器がこの時代に現出した。これは全く、木燧の發明から生



れた火の力であつた。而して火の力は更に進んで鑛

物界を侵し、銅が始めて人類に利用せらるるに至つて、石器の時代古から漸く銅の時代に移つた。しかし銅は柔かい鑛物であるから、銅代で作つた器具は、其の効用が必ずしも石器に優るもののみでは無かつた。されば銅の時代には石をも併せ用ひたが、その石器は精巧に磨き立てたものになつた。

九 史前の人類 下

古石器時代に於て死者を葬つた形迹を見れば、その時代の人類が來生の存在を信じて居たと思はるべき何等の形式もない。その時代に於ては、人類は生活の爲に奮闘し續け、周圍に對する應接の爲に忙殺されて居たから、未だ自覺の念に乏しく、従つて箇人感が起らず、來生などに思ひ及ぶべき機會が無かつたのであらう。然るに新石器時代に至つて生活に餘裕を生ずると共に、箇人感が生じ、死後の生活をも考

へるやうになつた。種種の供物を死者に獻げた迹を見れば、來生の信仰があつたことは明かである。かくして人は始めて思索し研究する動物になつた。

されば彼等の進歩は日に益速かである。彼等は銅九分、錫一分を和して青銅とすることを學んだ。青銅は銅より堅い。石器は茲に於て無用に屬した。石器の時代は遂に全く去つて、青銅の時代が來た。

此の前後に、始めて都市が建設された。都市は文明の倉庫である。文明は都市に依つて涵養された。人類の政治的生活は始まつた。而して之と同時に、文字が

人類の間に行はれるやうになつた。

言語の發明、木燧の發明、文字の發明は人類の三大發明と謂つべきものである。言語の用は、文字の發明に因つて、廣く且つ大きくなつた。同情の區域は之が爲に極めて廣く、同情の熱度は之が爲に極めて高くなつた。政治社會は始めて動かすべからざる基礎を得た。

最初の文字は、今の亞米利加インド人の用ひて居るやうな畫文字であつた。次に謎繪とも云ふべき會意の文字を以て、想像若しくは音を示すやうになつ

た。而して後、進歩の幾階段を経て、今のやうな音字に達した。

文字の發明の後に、人類は更に進んで、遂に鐵を用ふるに至つた。銅の時代は去つて、鐵の時代が來た。西紀前一千五百年代には、西亞細亞の人民は既に鐵を用ひて居た。而して吾吾現在の人類も亦依然として鐵器時代にあるのである。(山路愛山「東西六千年」による)

一〇 晩 秋

一 野 路

野路行けば、粟の收納の盛りにて、稻の收納もぼつ
ぼつ始まりぬ。蕎麥雪の如く、甘藷の畑は彌、繁りに繁
れり。百舌鳥鳴く村に、紅なる、黄なる、星の如く、柿の實
の照れるを見よ。

彼岸花・螢草・野菊・蓼、小さき粟の如く、稻の如く、黍の
如く、燕麥の如き八千草に鳴く蟲の音を聞きわけ行
けば、蛙飛び、螽斯飛び、稀には蟹がさがさと隠れ行く。

二 月を帯ぶる白菊

墨繪の如き樹影を浴びて、獨り中庭の夜に立てば、
月を帯ぶる白菊ほのかに香りて、花の月と囁く聲も

聞えぬべき心地す。俯きてその一枝を折らんとする
に、しとどの露にぬれたり。折れば月影ほるほるとこ
ぼれぬ。

朝來の雨止み、風息み、月夜の靜味、いひ盡し難し。何
に動かされてか、井戸側の無花果の葉のがさりとい
ひしあとは、一庭寂然として月と影と共に眠りぬ。唯、
稀に、稀に、檐滴の蔭闇き方に私語するのみ。

三 秋 郊

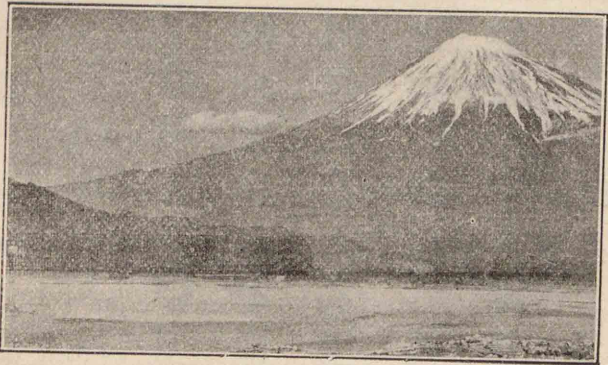
柿の落葉を踏みて後山に登る。黄茅蕭蕭として亂
れ、龍膽の碧、棗實の紅と徑を綴る。山上より見れば、田

は盡く刈られ、麥の緑をほほのかにして、村も瘠せたり。晩秋の野いたく寂びぬ。

烏五六羽あり、山上の樹より立ち、鳴きつれて彼方の村に向ふ。啞啞の聲満山に響く。

四 富士雪を帶ぶ

富士雪を帶ぶ、さやかに雪を帶ぶ、秋空何ぞ高き。風、威を帶ぶ、相模灘の怒號何ぞ壯なる。この空とこの海との間に、玲瓏として立つ富士の秀色を見ずや。絶頂より五合目のあたりまで、銀よりも白き雪は桔梗色の山層を被ひて、上は隈なく、下はさながら笹縁とれ



によりて生く。

(徳富蘆花―自然と人生)

る様に山を包む。雪色淨うして點塵なく、日光に輝きて水よりも澄める晩秋の空に襯し、豆相の連山を踏み、萬波雪の如く立騒ぐ相模灘を俯瞰して、秀麗^嶽、皎潔、神威十倍するを覺ゆ。

雪^の 嶽頂の雪、實に富士の秀色神采を十倍せしむるのみならず、更に裾野の大景に眼晴を點ず。東海の景は富士によりて生ず、富士は雪

一一 眞田大助

元和元年五月七日、眞田左衛門佐は譽田口に在つて秀頼公の御出馬を待侘び、子息大助を人質として城へ入れんと言ひけるに、大助この時十五歳、父左衛門佐に答ふる様、今日の合戦に父御は討死の御覺悟と察し候。生れて父母の懷に人となり、十五歳になり候迄、片時も御側を離れ候はぬ母様には、去年御城へ參向の時、生きて御別れ申上げ、その後御文の度度に、最愛の一子なれば、ながらへさせたきは山山なれど、

眞田幸村。(三三三)

豊臣秀頼。(三五三)

弓矢とる身の習なれば、構へて父御の御最期に後れず、同じ枕に討死し、眞田の家名を揚げてよ。と常に御教訓候に、唯今父御を見捨て參らせ、御城へ歸り候は存じもよらぬ事に候。唯いつ迄も御供して、父御の討死し給はば、御死骸に並び、大助も同じく討死を遂げ候はん。と思ひ切つたる氣色にて、父が鎧の袖に取付き、離るべくも見えざれば、父左衛門佐は更にも云はず、これを見聞ける人人は泣かぬ者こそなかりけれ。左衛門佐は眼蓋に餘る涙を拂ひ、大助を礎と睨み、扱も未練の繰言かな。武士の家に生れし者は、時と場合

に依りて、親をも身をも忘れてこそ弓矢の道に叶ふべけれ。ましてや、これは、御城に歸り、秀頼公の御最期の御供せよといふなるを、父がこの期の命を用ひずば、君には不忠、父には不孝ぞ。少時の別はありとても、冥途に於て必ず逢はん。早早御城へ歸るべし。と詞もあらく、大助が取縋りたる手を拂へば、大助今は詮方なく、殘惜しげに父を見て、さらば御城へ歸るべし。又來世にて見參の一語を殘し別れ行く。父の幸村はさらぬふりにはもてなししかど、暗涙胸に溢れしなるべし。

かくて大助は城に入りしに、程なく敵軍城に攻入りしかば、附添ひ來れる郎黨は騒ぐ身方に隔てられ、大助ただ一人となり、秀頼公の御供して、蘆田曲輪、米見矢倉に籠り居り、七日の朝食したる儘にて、翌八日午の刻まで矢倉の下に居たりしが、大助も秀頼公御先途の御供三十二人の一人なれば、曲輪の中に入り、秀頼公の御生害を今か今かと待つ中も、父の行方の心許なく、城中に遁れ入來る人人に向ひ、眞田は何となり候ぞ。と思ひ餘りて聞きければ、その内の一人、さん候。眞田殿は天王寺の前にて關東軍大勢の中へ切

つて入り、馬を縦横に駈廻し、花花しく戦ひしが、終に叶はず討死し、槍十本ばかりにて槍玉に揚げられ候。と、慥かに言ふ者ありければ、大助はそれより物をもいはず、去年母に別るる時、最期にはこれを持ちて討死せよ。とて、與へ給ひし水晶の數珠を、鎧の引合せより取出し、念佛してぞ居たりける。速水守之これを見て不憫に思ひ、大助が傍に立寄り、貴殿は一昨日譽田にて手柄なる大刀打、その名高し、又高股に槍手をも負ひたる由聞及べり。疵の痛みは無きか。秀頼公にもやがて御和談調ひなば、御命には別條なき筈なれば、

*叔父眞田信之、この時東軍にありき。

貴殿は早早立退き給へ。某、人を添へ眞田河内殿まで送り届け申すべし。と、いと懇に聞えしかども、大助はいらへもせず。只口中にて念佛を唱へゐたり。

八日午の刻といふに、秀頼公御生害ありしかば、御供の男女三十二人皆一同に生害し、矢倉矢倉に火をかけて、同じ煙に立ちのぼりぬ。中にも眞田大助は心靜かに鎧を脱ぎ、十五歳を一期として、腹十文字に搔切りて父と君とに殉ぜしは、天晴武士の子孫ぞと、譽めもし惜しまぬ人ぞなかりける。(柴野栗山―古土茗話)

一二 蘇 武

風颯颯の秋ふけて、
 日をかさねたる旅衣、
 おもき君命いただきて、
 遠く匈奴^{*}の國に入る。
 野邊の草木や鳥のこゑ、
 聞く物の音も見る色も、
 いづれか夷のものならぬ。
 思へば遠く來つるかな。
 ながれゆく水、音たてて、

^{*}蒙古地方の遊牧
 の民、漢の時代
 に勢盛なりき。

胸にうれへの波高し。
 故郷母あり、雁鳴きて、
 老の寢覺やいかならん。
 よしや幾夜の草枕、
 旅寢の空にむすぶとも、
 國家のために盡すべし。
 君命おもく、身は輕し。
 かうと覺悟は定まりぬ。
 使命つぶさに傳へつつ、
 匈奴の王に面接し、

*蘇武が匈奴に使せしは、漢の武帝の天漢元年(五十六)なり。

蘇武は國書を呈しけり。

もとより非道の王なれば、

國書の旨意は聽かざれど、

單身敵地につかひせし、

蘇武が勇氣を惜しみつつ、

ある時蘇武を召しよせて、

「降り仕へよ、しかあらば、

おもく汝を用ひん」と、

説きさとせども可かざれば、

國王おほいに怒をなし、

蘇武をとらへて、荒山の

いはやの中に幽閉し、

食を與へて苦しめぬ。

頃しも北風雪を吹き、

寒さ膚をつんざきぬ。

飢うれば枯草を雪に和し、

いのちを繋ぐ料となす。

日數ふれども死せざれば、

えびすら怪しみ且つ怖れ、

こたびは蘇武を野に移し、

羊の群をまもらせて、
 「雄羊はらむことあらば
 放免せん」とあざけりぬ。
 覺悟はしても無念さに、
 眠られぬ夜も幾度か。
 一夜雲なく月すみて、
 秋も最中の空の色、
 せめてはかくて在ることをと、
 雁に託せし筆のあと。
 かくて春去り、夏きたり、

また秋の風、冬の霜、
 落葉落葉のかさなりて、
 十有九年ゆめの間や。
 老いて屈せぬ忠節を
 天佑けてか、不思議にも、
 雁の使のかひありて、
 楽しきたよりぞ聞えける。
 國と國との和議成りて、
 蘇武は赦*され歸りしが、
 立ちいでし時の黒髪は

*漢の昭帝始元六年、(西〇)

いつしか雪とぞなれりける。(坪内逍遙)

一三 果物

夏の初は、青梅こそ心地よきものなれ。青葉の繁れる枝に眞青の實の珠をなせる、美しといふにはあらぬど心地よし。

櫻實さくらんぼの涼趣は、全く青梅と相反す。青梅は二三顆小皿に盛るによろしく、これは累累數十顆を盤にし、光彩陸離たらしむるに妙あり。

「林檎食うて牡丹の前に死なん哉」子規のこの句、歿

*
明治の俳人。

前四五年頃に成りしものなり。水菓子の詩史に子規の名を逸すべからず。林檎の味必ずしも梨を壓するに至らず。然れどもその大にして美なるは津津として詩趣を生ず。詩人の食物とすべきは林檎なるべし。林檎は舊日本にはなし。その味にも亦新日本の特調あり。芭蕉蕪村に梨の味ありとせば、子規の句には自ら林檎の味あるを覺ゆ。

人、未だ夏に馴れず、水菓子の拂底なるとき、夏橙市場に出づ。風貌堂堂殆ど八百屋の店頭を壓す。帝都の人は葉蔭に薰れる夏橙を知らず。濃緑の葉の繁れる

長州萩にありし
吉田松陰の家塾
なり。

(二) Banana.

枝に、この實の金色に輝く夕庭に水打つて月の昇るを待つ。這般の涼趣片田舎の特有なるべし。夏橙は見るばかりにて涼味あり。その肉味の美なるもの程、外に光澤の麗しきものあり。夏橙の本場は長州なり。松下村塾を環りて夏橙の薫ずるあり。松陰先生は夏橙の畑の草を抜きつつ、その門人を教へたるなるべし。バナナと鳳梨との詩趣は新體詩のものなるべし。この兩者日本になし。その詩趣も舊詩歌に求め難し。東洋に於ける果物の文學に最も豊富なるは桃なり。而して桃太郎に至りては即ち御伽噺の國民的なる

ものなり。

芭蕉の句。

「枯枝に鳥のとまりけり、秋の暮」の一句能く俳壇の舊套を道破す。而してこの句を想へば、晚秋の天、萬木凋落して、紅柿ばかり枝に残れる畫趣眼前に浮ぶ。予輩は柿を推して日本の果王とするに躊躇せず。甜美にして豊満なるその肉、黄葉のまばらなる大木に紅く熟したる、食ふべく、畫くべく、古來果物の第一なり。柿は枝を添へたるがよし。小さく圓きものは殊に枝を重ねて山の土産とするによろし。苺は極めて心地よきものなり。かの紅玉の燃ゆる

中より涼味の湧きいづるこそ殊に面白けれ。これを
玻瓈皿に盛りて、純白の砂糖をかくれば、満開の紅梅
に曉雪のふりかかれる趣あり。

甲州は葡萄の國なり。月の雫の一語、人をして神往
に堪へざらしむ。山に水晶あり、地に「月の雫」あり。予は
いまだ甲州を見ざれども、東海道の富士川を渡る毎
に、水源なる美しき國を想像す。藤棚と葡萄棚とは屋
外にあるべき家庭の棚ならずんばあらず。藤は白花
をよろしとし、紫は葡萄に譲るべし。葡萄棚を茶の間
の外に築きて、そのさがれる房に夏の風を待ち、秋の

月を迎ふる、亦清き樂しみなり。

柘榴は花も葉も餘り引立たず、唯その實、日本畫に
よろしく、油畫によろしく、これを盆栽にして花より
も畫趣あり。柘榴の小粒は極めて美し。その味も亦清
冷、仙味第一たるべし。（横山健堂）

一四 アルプ山越上

お別れ申したるは、故山の百花花やかに我が
戎衣の袖に薫り、春風軽く征旗を吹送る頃に候
ひしを、いつしか花去り、青葉も過ぎ、秋月また更

西紀前二一八。
カルタゴ。

(一) Alps.

けて、アルプ山麓に到り着きたるは、はや満目の霜露、鐵衣にしみわたる頃と相成り候。幸に越えては來つる難關の苦辛、お察し下されたく候。殊にアルプ天嶮の横絶は難中の難、冒險中の冒險にて候ひき。

雲外萬里、見あぐる幾重の峻岳、天を摩してそそり立ちつつ、遠く伊太利の國境數百里を圍み、さながら宇宙はここに劃せられたるが如し。仙鶴の風に乗るは知らず、天人の雲に駕するは知らず、梢を傳ふ猿猴の手もなほ攀づべからず、嵐

(二) Hannibal.
(B. C. 247—183)

(三) Roma.
(Rome.)

(四) Egates. (Ægadian.)
シチリヤ島の西。西紀前二四一年この島邊にてカルカゴ艦隊全滅す

に翔る暴鷲の翼もまた上るべからず。

この擧もとより空前の冒險たり。されど我がハンニバル將軍のこの擧は、止むを得ざるに出でたる懸命の壯圖たるなり。我に、地中海を我が物と横行したる昔日の海上權の強きあらば、我に、地中海沿岸を壓したる昔日の海軍力の大いなるあらば、羅馬城下の盟、いかでこの懸軍萬里の遠征に待たんや。悲しいかな、エガテズ島邊の海戦に我が艦隊の殆ど全滅し去つてより、海上權は全く羅馬に掌握せられて、地中海上はこの

* Carthage.

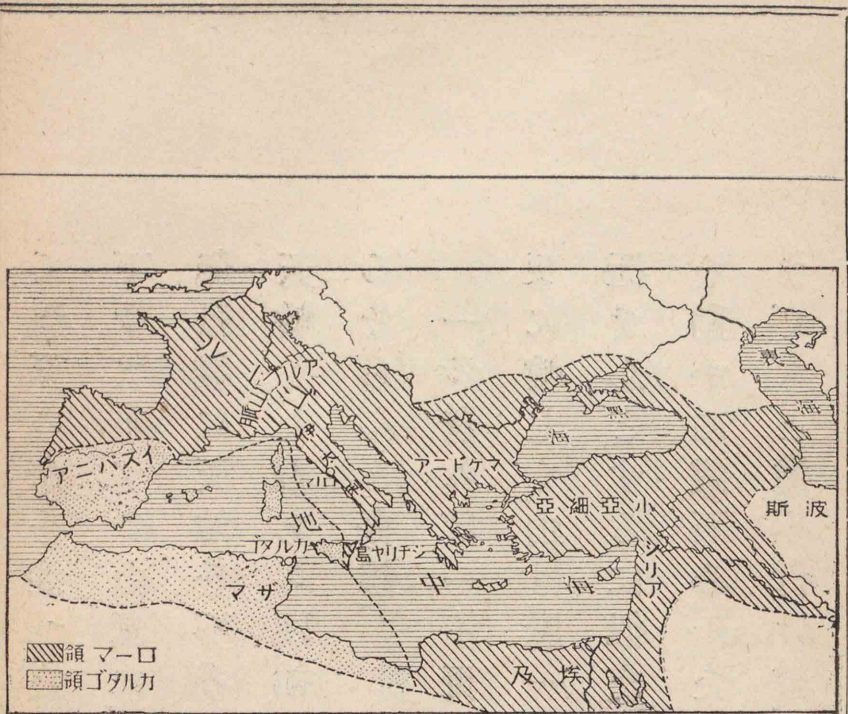
二十年間、敵軍の縦横に闊歩するところとなり
はて、今日のカルタゴは頼むべき艦隊を有たず、
渡るべき海のあらざるなり。海渡るべからず、艦

頼むべからず、しかも
羅馬は是非に一撃せ
ざるべからず。



ルバニハ

我がハンニバル將
軍が懸命の壯圖によ
つて、海なく艦なき我がカルタゴは、今こそ對岸
の敵國に討入るべき道を得たるにて候へ。今日



の我がカルタゴはこの
行路のほかに征騎の進
むべき道なきなり。我が
カルタゴが一舉して羅
馬本國と雌雄を決すべ
き道は、全くこの一路の
存するのみにて候。
事はかかり、何ぞここ
に趨起すべき、何ぞここ
に逡巡すべき。莞爾とし

て進軍の命を迎へたるは全軍九萬決死の士、吹下すアルプの山風に、征旗堂堂と押出したる意氣は、誠に天地を呑みつくしたる概あり。あはれ、天嶮もし心あらば、拍手してこの珍客を迎へたるならんと存候。

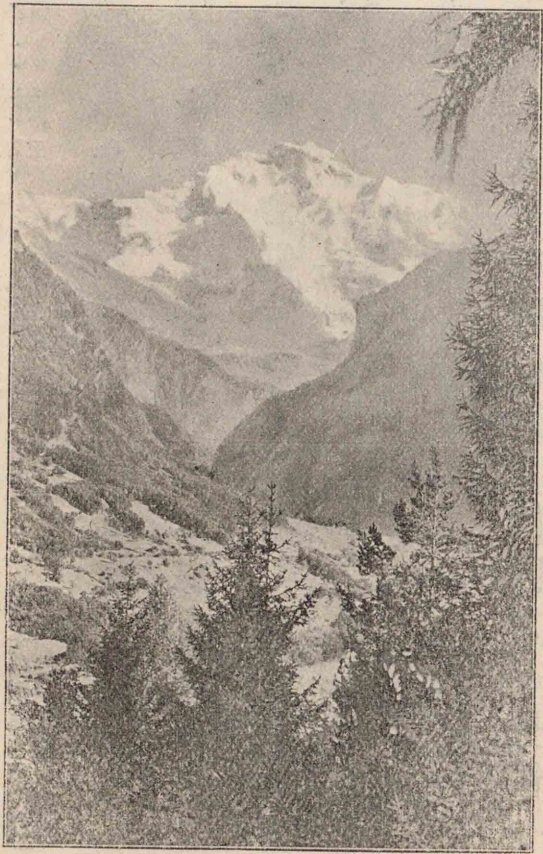
一步登れば一步更に危く、一崖攀づれば一崖更に嶮しく、山は層一層前途を塞ぎて、我が軍を拒まんとするに似たり。されども人人はいつかな動かぬ鐵石心、かたみに勵み勵まされつ、何處までもと進み行けば、數萬の蠻民は左右の高峯

に群りて、我が領土に奇怪なる推參者、一步もゆるさじ」と猛り立ちて、亂下する矢石は吹雪まじりの雨霰、面を向くべきやうもあらず。さすがに一時は辟易して、ここに露營を張らんとせしが、妙案奇謀に富める將軍は忽ち一計を案ぜられ、夜に乗じて、露營を撤して進軍せられぬ。そは蠻民どものをかしさは、晝間のみ活動し、夜は各自の小屋に歸りて、高峯の防禦の空しきを探り得たるが爲に候。

一五 アルプ山越 中

かくて全軍は暗澹たるアルプ山谷の深夜、皚皚たる氷雪の光に、道なき道を急ぎ、志したる高峯へとむかひたるが、いかにせん、蜒蜒たる數萬の大軍なれば、全軍未だ登りつくすこと能はざるに、天は早くも明けそめて候。蠻民は小屋の眠さめぬ。彼等の活動すべき時となりぬ。夜は萬物靜止の時と心得たる彼等の曉起の眼前に、いっしか我が大軍の高峯を越えゆくを見たる、その驚やいかばかりぞ。その驚はやがて怒となり

て現れ候。彼等は山上の大石を搖がして轉轉落下せしめつ。轟轟たる響は天柱を折りつくし、地



山 プ ル ア

維を 碎き 盡さ んと 見え、 凄 じさ

言ふばかりもあらず。口惜しいかな、崖下の我が

軍は見る見る幾丈の岩石に打倒され、千仞の谿谷に跳飛され、白雪皚皚たりし山谷は忽にして唐紅の血潮の色と變じ、風は血を含みて腥きが中に、轟轟たる落石の響に混る人人のをめき叫ぶ聲、慘たる當時の光景、暫しはこの世の天とも覺えざりし一行の心情、とても申し盡す筆も詞もこれなく候。

我も人も征路の露とは固より覺悟したる命にはあれども、名もなき蠻民のかかる虎狼の毒牙にかかりて斃れたる、幾萬の同胞が無念の精

靈は、さこそ妄執の鬼と迷ふらめ。いでや同志が弔ひ戰、蠻人どもを鏖にもと、一度は思ひはやりもしつれど、當の敵は羅馬にあり。志すは敵の不意に在り。一刻も猶豫すべきにあらずと思ひかへし、戀しき同士の墳墓となれる山谷に、暫し目禮の別を告げつつ、その山を辭すれば、前山は我等を迎へて更に高く、谿路は我等を待ちて更に峻しく、蠻人は我等を遮りて更に頑強。かかる嶮難の間に苦闘奮進すること八日間、辛うじて、全軍、アルプ絶頂の天風に、覺えず快哉の聲をあげ

たりしは、實に九日目にて候ひき。天外萬里の空、遠く茫茫たる伊太利の平原を瞰下したりし時の愉快さ、お察し下されたく候。覺えず戈をふるひて躍り下らんかと狂はれたりし程に候。

一六 アルプ山越下

全軍の士氣はここに新に、全軍の意氣は既に伊太利の平原を呑み、全軍の心は既に羅馬の都門に城下の盟を待つばかりに候。されどアルプ天嶮の飽くまでも羅馬最眞に作られたる憎さ

は、伊太利に面したる方は亂山一層峻嶮を競ひ、加ふるに氷雪を以て覆はれたれば、これを下らん危さは、これまでにまさる冒険にて候ひき。猛虎の如き巖は風雪を着て咆哮し、削るが如き山骨はここに數丈、かしこに幾丈、しかも氷雪に研ぎすまされたるをや。一步を誤れば萬事休す。眼下の谷は千仞の口を開きて我を呑まんと待ちうけたり。過つてこの非運に陥りたる者も少なからず。戈を杖に、踏みしむる足もと半ば滑りつつ此處を下れば、積雪は又前途を埋めて山谷を

辨ぜず。一步誤れば身は萬丈雪底の屍。此處にて
 も一行の葬られたるもの少なからず。嶮又嶮、慘
 又慘、命は天に託してひたすらに進みゆきたる
 に、見上ぐれば中天に入る絶壁、見下せば地底に
 沈む断崖、路は此處に絶えて、行くべき方も無く
 なりぬ。ここになほ勇を鼓して、この窮路に先導
 を試みんとしたる一隊の兵は、空しく悲壯なる
 最期を遂げて復歸らず。人既にかかり、ましてや
 幾多の馬隊をや、象隊をや、到底これをやるの道
 なき事とはなれり。さてもやはいかで止むべき。

決死の全軍はここに岩を毀ち山を裂きて、行路
 を開通する事となりぬ。天嶮改造の工事後、人も
 し聞かば壯快の感多からん。されど當時の我が
 軍はただただ苦痛に悩む外はあらざりき。難境
 かくの如くなれば、ここに露營すること三日間、
 寒風は肉を劈き、氷雪は骨を刺すが中に、一片の
 火の温むるなく、寸分の蔭の掩ふものなくして、
 吹きさらされし程の苦痛は、なかなかに來し方
 に勝る辛さにて候ひき。かくて虎口は逃れ出で
 しかど、嶮難はなほ此處に盡きずして、到る處に

(-) Aosta.

我が軍を苦しめ、辛うじて麓近きアオスの里に着きたるは、それより三日目の事に候ひき。

冒険中の大冒険、アルプの横絶のつひにここに遂げられたる嬉しさ、一時は夢かと怪しむばかり、御察し下されたく候。日を費したること十日、九萬の大軍中、残るは僅かに二萬の歩兵と六千の騎兵とに過ぎず。この二事以てその慘澹たりし壯舉の情況を示し盡したりと存候。生き残りたる者は肉落ち、骨瘦せて、ただ見る餓鬼の群に異ならず。餓鬼よ、餓鬼よ、羅馬の血に飢ゑた

(=) Ticino.
(三) Trebia.
(四) Trasimeno.

るカルタゴの餓鬼にこそと、互に笑ひ興じたる次第に候。

このカルタゴの餓鬼は突如として、アルプ天嶮を破りて、伊太利の平原に荒れいでたるなり。敵の驚は察せらるるばかりにて、チチノ河邊、トレビア河頭の戦捷より、更に進みてはトラスメノ湖畔の大勝、我がハンニバル將軍の壯圖は着その成功を示し得て、天運未だカルタゴを離れざるかと思へば、そぞろ嬉し涙の止めかねて候を硯に受けて、あらあら申述べ候。(鹽井雨江)

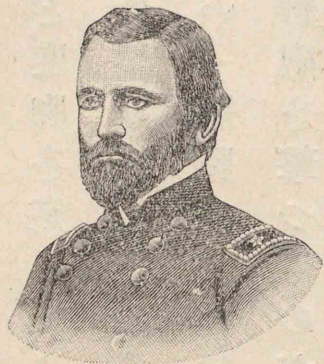
一七 辛抱くらべ

人は我慢が肝腎である。ナポレオンも言つた、何でも戦闘は五分間の辛抱で勝てる。と。戦闘ばかりではない、百事皆その通りで、こちらが苦しいと思へばあちらも苦しいのだ。我慢較べ、辛抱較べて勝負は分れるものである。

ここに北米合衆國の大偉人グラントと云へば、鬼將軍と唱へて、南北戦争四年の間に、一度も負けたことのないと云ふ豪の者。この點より云へば、ナポレオ

* Grant.
(1822—1885)

ンより偉い大將だ。しかしその自叙傳を繙いて見れば、彼もやつぱり人間で、鬼ではなかつた。



グラントが初めて戦場に出た時、一大隊を率ゐて居たが、こはくてこはくて堪らない。しかしだれも皆初陣のこ
と故、顫へて居るのもあり、顔色の青くなつて居るのもあるか

ら、大將が顫へてはならないと、大いに我慢をして力んで行くと、先方からも一隊の敵兵が進んで來た。これを見ると、その軍容の勇ましき、旌旗は空に翻り、銃

劍は太陽に閃き、正堂堂と押寄せ來る勢に、一目慄然とする程に恐怖心が起つた。けれども男子一旦死を決して出掛けた以上は、固より退く譯には行かぬと、度胸を定めて、こちらもどしどしと向つて行くと、最早互に程近くなつたが、雙方とも未だ發砲はしない。一體臆病な者は、見當も定めず、むやみに遠方から鐵砲を撃つものださうだが、兵法に従へば、なるべく接近してから一齊に砲と撃つのが本當であるさうで、グラントは兵學校卒業の人であるから、出來得るだけ接近してと考へて、やはり敵を見ざる時の如く、

依然として歩を進め、恰も恐怖などいふ事は更に知らざるが如く、力みかへつて向つた。すると兵卒どもは驚いて、「何と、わが大將グラントと云ふ人は、『渾身皆膽』とでも云ふべき人であらうか。われわれは顛が震へ、手が震へて、物もいへぬ程怖ろしくなつて來たが、グラントは一向平氣な顔で進まれる。世に鬼將軍とは實にわが大將グラントの事であらう」と、感服してついで行く。グラントの心になつて見ると、なかなか鬼將軍どころでない。實は怖氣將軍で、怖くて怖くて堪らないのである。まだ接近もしないうちから、幾度

か發砲しようと思へたり、又は愈堪らなくなつて、逃げようと思つたりして、遂には、殆ど目も見えず、耳も聞えぬ位に逆せ上つて、皆無、分別がつかなくなつて了つて居たといふ事である。

然るにここに一段面白きは敵軍の方である。これは南北戦争が終つてからの話であるが、一日、偶然ある處で、グラントがこの初陣に向つた時の敵の大將、何某に出會つた。所がその將軍の話に、「グラント將軍、實に君の大膽には恐れ入りました。かの何年何月、何處の戦に、予は初陣の事として、おぢおぢ、君に向つた所

が、一向君は發砲もしない、又更に退きもしない。そこでいよいよ怖氣がついて、よほど我慢はしましたが、とうとう浮足となつて、君にさんざん破られました。まことに君の膽力には恐れ入る。その勇武には辟易しました。」と諧謔交りに語り出すと、グラントは大口を開いて、「これは實に面白い。拙者も實はかくかく」と、悉く前條の次第を物語り、君が逃げはじめたのを見て、やうやう勇氣を回復した位で、拙者の怖氣は腹より胸に至り、殆ど喉にまで上り、已に息も出來かねようとする有様であつた。」と、腹藏なく己が當時の臆病

を白狀して笑ひ興じたといふことである。

勿論、幾度も戰場を経て、千軍萬馬の間を往來してからは、こんなこともあるまいが、初陣の時には如何にもそんなものであらう。さうして見れば、ナポレオンの實驗談のごとく、畢竟少少の辛抱の較べ合ひで、つい勝敗が分れるものだと言ふことは、眞理に相違ない。どうせ死ぬか生きるかの場合であるから、仕方がないと度胸を定めて、何でも思ひ切つて覺悟をするのが肝要である。これは決して干戈の戦争ばかりではない、世上は百事戦争である。びくびくして居る

*山川の末に流るる椽殻も、身を棄ててこそ浮ぶ瀬もあれ。(空也上人繪詞傳)

と却て丸に中つて斃れて了ふ。劍術の極意にもある通り、^{*}身を棄ててこそ浮ぶ瀬もあれ。で、鬼將軍たる格蘭トでさへも、最初はなほあの通りであつたと考へて、人生勝利の祕訣を此處より學ばなければならぬ。(松村介石)

一八 學藝に志す者の誠

今の人、或は學に志し、或は藝に志すもの、一旦憤を起し、晝夜を分たず勉め勵むといへども、已に一月を経、半月を過ぎ、怠る心早く生じ、わがつとめの至らざ

るをばいはで、性質の過に委す。

馬ははやしとて、朝暫く走りてやまんにかでか牛の終日あるかんに及ぶべき。谷間の石の磨かれ、井榦げんのまるくなるも、豈に一朝一夕の力ならんや。今日やまず、明日やまず、今年止まず、明年止まず、而して後そのしるしあり。

人一生の力をその道に用ふるさへ、尙その奥儀にいたるはやすからず。況や我が一月半月、乃至一年半年のつとめを以て、他人一生の功に比せんとす。思はざるの甚しきなり。

唐の大詩人、字は太白。(一三六) (一三三)

書家。日本三蹟の二。(一五六) (一五六)

昔、李白、書を匡山に讀む。漸く倦みて他行せし時、道にして老人の石にあてて斧をするにあふ。これを問へば、針となすべしとて磨れり。と云ひけるに感じて、勤めて書を読み、終にその名をなせり。小野道風は本朝名譽の能書なり。若かりし時、手を學べども進まざること厭ひ、後園に躊躇しけるに、蛙の、泉水のほとりの枝垂れたる柳にとびあがらんとしたれども、とどかざりけるが、次第次第に高く飛び、後には終に柳の枝にうつりけり。道風これより藝のつとむるにある事を知り、學びて止まず、その名今に高くなりぬ。

學に志すものここに三思せざるべけんや。

(三浦梅園—梅園叢書)

一九 水の力

天に聳ゆる千尺の

巖二つにつんざきて、

山も轟にたぎり落つる

水の力の頼もしや。

雲、絶壁を蝕んで、

老樹静かに、枯藤垂れ、

亂石せき切る谿狭く、

山靈、水の去るを愕しめど、

我大海に到るべきなり、

我大海に行かんとぞ思ふ。

我強力あり、我進む。

積礫は我おし流してん、

磐石は我躍り超えなん。

我強力あり、我休まじ。

遮る岩は岩くやしてん、

留むる岸は岸崩してん。

我戰を厭はざるなり。

わが呐喊し、怒號する

聲は常磐に衰へじ。

見よ、大海に到らでは、

必ず已まじ、休むまじ。

と獅子と狂つて、雷と鳴る、

瀧川の水、瀧川の水。

水の力の頼もしや。(幸田露伴一出處)

二〇 ナイヤガラの瀑

(←) Clifton.

(=) Pao.

(≡) Niagara.

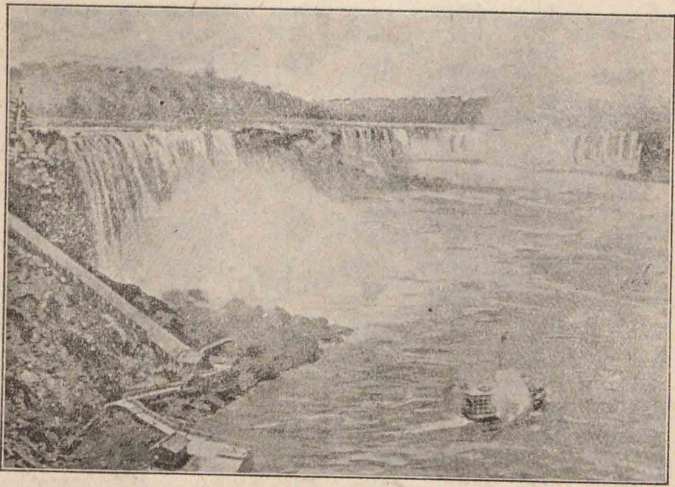
この葡萄牙語の訛。

英領加奈陀のクリフトン町クリフトンホテルの樓上で、朝餉のパンを引裂きつつ、眞正面に世界一のナイヤガラの瀑を見る。

閉めきつた硝子窓の中に在つて、尙明かにその響を聞くもことわり、四時を分たず、晝夜に斷えぬ百雷とどろとどろに鳴渡つて、四十餘哩の遠方に達するといふ。

朝靄の深くこめて居たのが、日高うなるままに、先づ左なる亞米利加瀑より晴れかかる。瀑の幅百餘丈、高さ十六七丈間に小島を隔てて、右なる加奈陀の瀑

は高さは一丈あまり低けれど、幅は遙かに廣くして三百丈にあまり、水量は亞米利加瀑に九倍すと云へば、その勢の凄じさ言はん方なく、捲騰る水煙、滿天の霧となり、雲となつて、濛濛漠漠、時ありて烈風瀑壺より起つて、吹きはらふ雲霧の斷間に、しばし全景をかいま見るのみ。偉觀とも壯觀とも、言語に絶えた次第である。されど「たき」といふ言葉よりして、まだ見ぬ人の思ひうかぶる景色とは全く相違した、稀代な有様である。那智の瀧、布引の瀧、音羽の瀧などの、眼に慣れた形は固よりの事物の名につけてある、蒟蒻の白瀧、



ナ イ ヤ ガ ラ の 瀑

着物の瀧、縞、何れか細長いものを意味せざる。然るにナイヤガラナ イ ヤ ガ ラの落水は、縦と横との割合が全然これと違つた、太く短い形である、布引は布引に違ないが、豎に引きはへずして、横に張つた布である。譬へば苗代の水の畦を溢るる様な景色で、一向「たき」といふ氣にはなれない。それに深山幽谷の間に在るのではなく、

* Butter.

平湖の水が平湖に移るのに、段がついて居るだけであるから、漢詩にいふ「一條白練挂危岑」とか、「萬丈銀河舞翠巒」とかの深遠な趣がない。おまけに、兩岸處狹く煉瓦家が立並んで居るのであるもの。この瀑を李白に見せても詩にならず、荅羯羅童子制吒迦童子をあしらつた所で、到底ありがたくは拜まれまい。つまり仰山一點張、風流氣なしの亞米利加式である。崖下の小亭に坐して瓢の酒を傾けながら、徐に詩を吟ずるといふ場處ではなうて、何處までも、ホテルの二階で^{*}バタを舐りつつ、水力電氣の發達でも感歎するか、或

は時間表を繰展げながら、電車に乗つて廻覽すべきものである。併し瀑でないといふことは出來ない。勿論世界第一の株は、何處からも故障を持込むことは出來ぬ。

ホテルの門前の大鐵橋は、英領より米領へ、ナイヤガラ河を渡らせる。橋の兩端に兩國の税關がある。馬車を驅つて其處等一廻りして、さて亞米利加瀑の瀑頭にのぞむ。石橋を渡れば小島がある。この小島によつて加奈陀の瀑と二つに分れて居るのである。遠く南を望めば、一碧天を涵して際涯なき大湖の水

が漸く迫つて、此方に向つて奔る。湖口愈狭うして流愈急に、幾段の瀬となり、瀑となつて、湍りつ、淀みつ、渦まきつ、沸り立つて、此の小島の兩岸に激し、急奔直下、彼の懸崖に向ふ。瀑となるまでの數哩のこの急湍も、亦彼の兩大瀑に劣らぬ壯觀をなして居る。湖上の數峯、湖畔の籬落、晝趣は瀑に無くして却てここに多いかと思ふ。殊にこの間に散點した三つの小島は、奇巖老樹の布置、自然の妙を盡して居る。

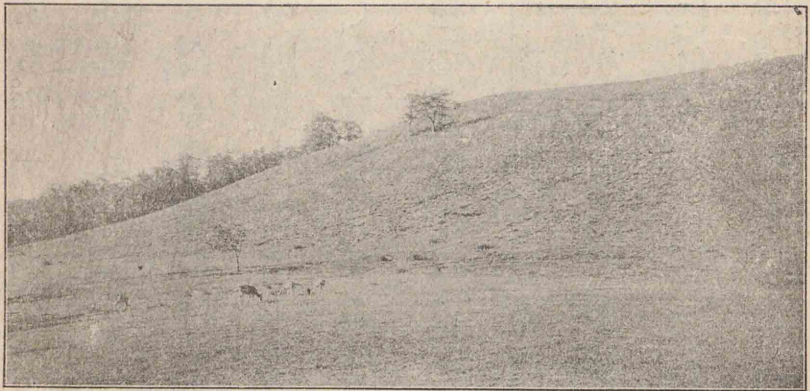
この邊の岩は、熟く見れば、板を重ねたやうな形で、面白い皴がない、質も堅くない。多分は水に溶け易く、

氷に碎け易いであらう。さすれば今の瀑を落してゐる懸崖も、次第に崩れ崩れて、瀑の形は何時となく變らねばならぬ。或は瀑の幅は今よりも廣くなるであらうが、瀑の高さは減ずるかも知れぬ。廣くなつて低くなつて了へば、ナイヤガラの名所は遂に痕なくなつてしまふであらう。一萬年でさうなるか、二萬年でさうなるかは知らぬが、兔に角、變ることは受合。ナイヤガラの見物は今の中である。(澁川玄耳、世界見物に據る)

二一 嫩草山

名を聞いてさへ優にやさしい嫩草山は、見て美しく、思つてなつかしい山である。八年前の十一月、始めて奈良に來た夕、三景樓の二階から、紺青こんじやうにけふる春日山に隣して、貂の皮で包んだやうに暖い色の、ふつくらとした嫩草山の美しい姿を見た時、余の心は如何様に躍つたであらう。丁度逃へたやうに、十五夜のまん圓な月が其の上に出て居た。併し其の時は遽しい旅で、山に上ることも果さなかつた。今はじめて其の懐ひを辿るのである。

霜枯れそめた矮い薄や刈萱や、他の枯れ草の中を、



嫩草山

人が踏みならした路が幾條か麓から頂へ通つて居る。余等は其の一つを傳うて上つた。

打見たよりも山は高く、思つたよりも路は急に、靴の足は滑りがちで、約十五分を費して登り果てた時は、額も背も汗ばんで居た。頂はやや平坦になつて、麓からは見えなかつた絶頂が、まだ二重になつて後に控へて

居る。唯一つある茶店は、最早店をしまひかけて、頂には遊客は一人もなかつた。

余等は額の汗を拭うて、嫩草山の頂から、大和の國の國見をしようとして眼を放つた。夕方である。日はすでに河内の金剛山と思ふあたりに沈んで、一抹、殷紅色の殘照が西南の空を染めて居る。西、生駒、信貴、金剛山、南、吉野から、東、塔の峯、初瀬の山山は、大和平原をぐるりと圍んで、蒼蒼と暮れつつある。この暮山の屏風に包まれた大和の國原には、夕けぶり立つ紫の村、黄ばんだ田、明るい川の流、神武陵、法隆寺、千年二千年の

昔あつたもの、今生きてゐるものの總てが、夜の安息に入る前に、日に名殘を惜しんで居る。直ぐ後の方で、がさがさと草が鳴つたと思つたら、夕空に映つて、大きな黒い影が二つぬりと立つて居る。それは鹿であつた。

足の下で、奈良の町の火が美しくつき出した。蜂の群のつぶやきの様な人聲物音が響く。ぼうんと、麓の方で晚鐘が鳴りだした。その鐘の音に促されるかのやうに、鴉が啞啞と鳴いて、山の暮から野の黄昏へと飛んで行く。

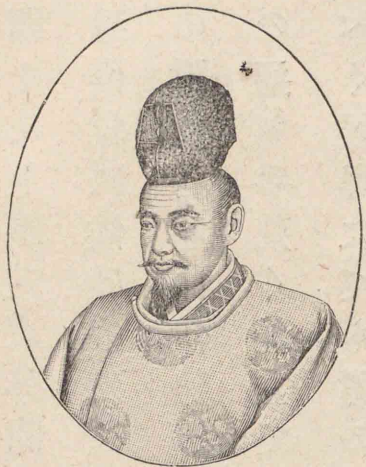
余等は今一度眼を平原に放つた。最早日の名残も消えて、眼に入る一切のものは蒼い霧に包まれた。大和は今暮れるのである。(徳富蘆花)

二二 公子の躰方を申し遣す

餘寒の處、その地子供等、緑の間にも障なきは一段の事に候。去る二十七日、餘四磨こと神勢館へ行き候由、これよりは歩行又は乗馬にて度度行き候が宜しく候。朝も未明より起き、水にて顔を洗ひ、薄着にて庭などに出て、子供相應いたづ

(一) 齊昭の生母。
(二) 齊昭の第十四子昭訓。
(三) 水戸城外の細谷村に設けたる砲術練習場。

ら致候が宜しく候。風を引き申すべしなど申して、用心致させ候は以ての外に候。とかく武士の



徳川齊昭

子は手強く、手あらに成長致し申さず候うては、おひおひ成長の上、公家や、町人、出家の様に成りゆき、天下の御爲を致候

様に相成らざるゆゑ、何分にも手強く、體を幼年より鍛へて育て候様に致したく、さて文武共に出精致させ候が宜しく候。文武を勵まし、それに

餘四磨附の女の名。
水戸の西郊借樂園の中にあり。

て死に候ほどの子は惜しからず候へば、死に候りても苦しからず候。他家へ養子に遣し候りても、柔弱にて、文武これなき者にては、水戸家の外聞よろしからず。外聞宜しからざる子供が成長致候位に候はば、死に候方はるかに勝り候故、表の附の者並に伊勢等へも申し聞け候りて、前文の通り手荒く仕立て候りて、文武を勵まし申すべく候。奥にても、附の者に申し聞け候りて、讀書のさらへ等をよくよく致させ申すべく候。文武稽古の間は、前文に申す如く、神勢館又は好文亭

等へ歩行致候が宜し、又相手などと竹刀打致候が宜し。子供の大人の如く致居候は身のこなれ悪しく、宜しからず候。

如才はこれあるまじく候へども、序にまかせ申し遣し候。牛乳は人乳をやめ候程の子供は誰が用ひ候りても宜し、毎朝取立ての乳を吞ませ申すべく候。一人にて五勺か一合も吞み候はば足り申すべく候。一橋より今以て日日取りに來り、一二合ばかりづつ遣し申候。何よりも牛乳に越し候薬はこれなしと存候也。

齊昭の第七子慶喜、出て一橋家を嗣ぐ。

なほなほ、餘四磨始め、毎朝の水は、只今にて
も浴び居候事と存候。若し浴び申さず候はば、
浴せ申すべく候。さるかほり、湯はつかはせ申
すまじく候。
(徳川齊昭)

二三、運命上

世の中の出来事の、來りてわれらの運命を左右す
るもの、その數、日に百千のみならず。然れどもわれら
がこれを認め得るは、唯その表面に顯れ、實際に結果
を生ずる一半のみ、その來らんとして來らず、殆ど己

(⇒) Boston.

(←) David.

の上に附着せんとして遂に附着せず、そのままに消
えゆく出来事は又實に夥し。若しわれらが己の運命
を左右する出来事を認むるのみならず、更に又將に
われらの運命を左右せんとしては空しく消えゆく、
暗暗裏の出来事を認め得んには、われらの生涯の望
と畏とは誠に無限無邊ならん。ダビッドの事、以て見
るべし。

吾等はダビッドの既往を知らず、亦知るを須ひず。
われらは、今ただ、二十歳の少年始めて故郷の田舎を
離れ、ボストン府なる叔父の舗にゆきて手代となら

んとする途上に在る渠を見るのみ。その履歴は小學校及び中學校にて、一通りの教育を受けたりといふのみにて事足るべし。田舎少年の心やすさは、車も借らず、日出より歩き出して既に日中に至れり。時はこれ夏のなかば、漸く覺ゆる疲勞と益加はる暑熱とに悩まされて、渠はかたへなる樹蔭に休息し、乗合馬車の過ぐるを待ちて、これに投ぜんと決意せり。

鬱葱たる幾株の喬木丘の上に直立し、ほとりには亦清らかなる泉の水の湧出づるあり。たとひダビッドならずとも、往來の人、誰かこの日にこの樹蔭に逢

りて、一たび憩ふことを思はざらん。ダビッドはまづ泉の水に渴きたる喉を潤し、徐に負ひたる包を解きおろして、その上に粗末なる木綿の手拭を重ね掛け、これを枕として仰ぎ臥したり。

太陽の光はうちかさなれる枝に遮られて、ダビッドの身に到らず。往來の路は昨日の大雨に濕ひたれば、いまだ塵を飛すに至らず。おひ茂れる緑の草は絶好の褥よりも快く柔かなり。泉の水は沸沸として常に耳邊に鳴り、縦横せる枝はそよ吹く風の爲に、よりより微搖するのみ。ダビッドは忽ち心陶然として恍

惚たるうちに、身は既にうまいの裏に入りぬ。

ダビッドは樹蔭に眠りたれど、途上には覺めたる人なほ少なからず。或は馬に跨がり、或は車に駕し、又或は歩みて、以てダビッドの眠りたる前を來往する者點點たり。或は傍目もふらず過行けば、渠のここに在る事を知らざるもあり。或は偶、渠がここに横はれるに寓目すれども、おのが心の忙しきに蔽はれて、別に意を留めず過行くもあり。或は渠の無邪氣に眠れるを見て笑ひつつ去るもあり。或はその路傍に眠れるを卑しみて眉しかめつつゆくもあり。禁酒會員は

偶、これを見て、醉漢が路傍に死人の如くに倒れたる一例を得たりと、自ら頷くもありて、非難稱羨、一讚一譏、すべてダビッドの上に聚まれり。而してダビッドはすべて感ずるなし。

幾ばくもなく、一輛のはでやかなる輕車あり、毛色麗しく揃ひたる二頭の馬を駕して、轡轡と馳來れるが、この木立の前に至つて突然として止まりたり。蓋し一本の轄くさ緩みて、一箇の輪にくるひを生じたればなり。車内に居たるは齡高く品よき商人夫妻なりき。夫妻は從者が輪を整ふる間、樹蔭に憩はんとて立寄

りたるが、その下にダビッドの横はれるを見るより俄かに驚きて、二三步しりへにさがり、ためつ眇めつ凝視して、纔かに心を安んじたれば、このうまいせる少年を驚かさざるやう、忍び足して再び樹蔭に立寄りながら、夫は妻に低語せり。あの快げに眠れるさまを見よ。あの呼吸する氣息の極めて容與たるを見よ。これ健康にして心安らかなる者にあらざれば能はざるなり。もし余をしてかかるうまいを得しめば、余はわが歳入の半ばを割くとも惜しからざるべし。と。妻は今、風に一方の枝押しやられ、一條の日光洩れて、

* Henry.

少年の面を射るを見て、自ら手を伸べ、糾れたる枝を解き、これを蔽ひやりながら、又夫に低語せり。天はこの好少年をわれらに與へ給ふと見ゆるなり。われらが従弟の子の所行に失望せる後、偶然この樹蔭に立寄りて、この少年に邂逅するは、誠に不思議のことならずや。且つ熟視すれば、何となく面ざし逝きしヘンリーに肖たるやうなり。試に渠を呼醒さんか。といふに、夫は打案じて、そは何の爲ぞ。われらは未だ少年の素性をも知らずして。といへば、妻も稍惑ひながら、なほ思ひ入りて、さりながらその無邪氣なる容貌、その

無心に眠れる姿を見給はずや」といふ。

二四 運 命 下

今や一箇の莫大なる福はダビッドの上に臨めり。この老夫妻は唯ひとりの子ヘンリーを先立たせ、家に蓄へたる巨萬の富を續がしむべき者もなく、せめては遠き従弟の子にてもと目ざして、これを尋ねしに、その子は所行不良にして心に適はず、今失望してポストンに歸らんとするなり。人はかかる時に當りては種種の想像をも畫くものなり。妻は再び繰返せ

り。試に呼醒さんか」と。

同時に背後に従者の聲あり、「修覆整ひて候」と。老夫妻はこの聲に、忽焉としてわれに復り、相携へて再び車に乗りぬ。ダビッドはなほ駒駒然たり。

老夫妻を乗せたる輕車は去つて未だ一里は行かざるべしと思ふ時、又兩箇の人ありてこの樹蔭に立寄りたり。いづれも木綿の頭巾を目深に被りたれば、審かに視るべからざれども、顔の色いたく黒くして衣服粗野に、且つ此處彼處に幾多の汚點さへ印したり。この兩人はこの邊に徘徊する山賊にして、今やそ

の贓物を分たんとて、この樹蔭に來れるなり。かくてダビッドの横はれるを見るより、一人は早くも一人を顧みて囁けり。叱、汝はあの枕にせる包を見ずや。一人、然れども若し目を覺さん時は、一人は急に懷中を探りて匕首の柄を微しく露し示して、「これのみ」と兩人は早くもダビッドの邊りに進みより、一人はその匕首を抜きて胸に擬し、一人は頭の方にまはりて、その枕とせる包を竊かに抽かんとす。

この時兩人の顔、もしダビッドをして眼を開き視しめば、直に以て惡魔とや爲さん。この時、忽ち一頭の

* Brandy.

黃犬あり、鼻をふりて頻に地上を嗅ぎつつ此處に走り來れり。一人は目ばやくこれを見て、「咄、休めよ休めよ。狗兒の主人を尋ねてここに至るならん」と。

一人は匕首を懷中に收めたり。一人は懷中よりブランデー一壺を取出せり。仕事の將に成らんとして敗れたるを笑ひ罵り、迭かたみに幾口かを飲むうちに、各、黎面に一種の紅を生じ來れり。後にはダビッドのことを忘れて、がやがやと打興じつつ、相携へて又立去れり。しかもダビッドはなほ齟齬然たり。

一時間の睡はダビッドの疲勞を醫し了へたり。ダ

ビッドは少しく身動きせり、徐にその唇を揺がせり。聲は無けれど、口の中に獨り半殘の夢を語り。遙かに響く輪聲、既にして殷殷、既にして轟轟、益、近くして益、高く、今や轆轤として尺寸の間に來れり。これ一輛の乗合馬車なり。ダビッドは俄かに躍り起てり。

「御者よ、茲に旅客あり。」

「上層に席あり。」

ダビッドは馬車の上層に登りて坐せり。ダビッドは前途幾多の望を懸けたる楽しきポストン府に馳行けり、かの清泉には一顧眄の別をだにせずして。

一たびは富の神のここに來りて、黄金の光その水面に照射せることのありしを、ダビッドは知らざるなり。又一たびは死の神のここに來りて、その水上に血を染めんとせることありしをも、ダビッドは知らざるなり。ああ、かれは生涯竟にこれを知らざりしなり。
(森田思軒譯)

二五 驚 異

嘗て須磨寺に遊べるに、一群の猿を飼へる家あるを見たり。多くの見物人集まり寄りて、猿の活潑に運

動せるを興がり居りしが、見物の一人、硝子の一片を投入れたり。一疋の猿、急ぎ拾ひ上げてこれを食はんとす。彼はそれを食物と心得たるなり。その堅くして齒も立たぬを知るや、彼は手を以て不思議さうにそれを支へ、仔細に點檢する様子なりしが、程なくその透明なるに氣附きたるものの如く、これを眼に當てて、右に左に向きをほりつつ見廻せり。彼は驚けるなり。吾人よりこれを見れば、硝子の透明體なるは何の不思議もなし。これ習慣によりて、その透明に慣れ居るが故なり。されどかの猿にとりては不思議中の不

思議なるべし。この不思議に接したる時、彼の驚異せるは固より其の所、これを嗤ふは愚かなり。

吾人が日常觸れ居る百般のこと、これ皆世の一大奇蹟ならざるはなし。森羅萬象、悉くこれ不思議にして奇蹟なるを、人はこれを知らずして驚かず。人の驚くを見ては、反つてこれを嗤ふこと、猿が硝子の透明體なるに驚けるを嗤ふに異ならず。

吾人が言語を以て語ること、これ既に世の一大奇蹟ならずや。吾人が箸を執りて飯を食ふ、これ亦一大奇蹟ならずや。況や生といふ大事實、死といふ大實在、

これを思うてこれに驚かざるは、何ぞそれ平氣なる。吾人は今日の人の餘りに平氣なるに驚異す。今の世の人はその心痲痺せるなり。

或人曰く、我とは何ぞやなどといふ疑問を發して、自らこの疑問に苦しむが如きは愚の骨頂なり」と。世間並よりこれを觀ずれば、まことに然り。されどこの疑問は、實に此の天地間に於ける我てふものの如何に不思議なるかを痛感して、而して後に發したる心靈の叫なり。これ眞面目なる心靈の聲なり。この心靈の叫を嗤ふが如きは、これ自ら自己の靈の痲痺せる

を表白するものなり。

疑問の解決は未なり。人は先づ驚異せざるべからず。驚異ある人は貴し。

* 國木田獨歩は人類を分ちて二種となせり。曰く驚く人、曰く平氣な人と。前者は向上すべく、後者は墮落すべし。(村井知至十聲)

* 明治の小説家。

二六 ことば

奇なるものは、ことばなり。茶碗とは茶事に用ふる碗の義にて、日本にて未だ良き陶器の出來ざりし頃、

舶來の陶器は茶事にのみ用ひしより、かかる名を負ほせたるを、今は茶を呑むものを殊更に茶呑茶碗などいふも可笑しからずや。珈琲茶碗などの名も奇しき限なり。

湯呑は湯を呑む器なるに、酒呑は盃のことにはあらで、酒を呑む人間なり。太刀持は太刀を持ちて主人に従ふに、太刀執は太刀を抜きて罪人の首をはぬ。蠅取蜘蛛は蠅を殺せど、火取蟲は火に殺さる。

金持は自分の金を持ち、袋持は他人の財袋のみかつぐらんを、弓取は自分の弓を執つて人間の櫻木と

謠はれ、草履取は他人の草履を摺む。理窟のなきは、ことばなり。

「ちやまが」「かだら」などいへば、片言とて誰も笑へど、正しき語にもこの類あり。古は「あらたし」といひしを、今は「あたらし」といひ、「いとほし」といふ語も、元祿頃には、常に「いとほ様や」などいへり。大つもごりの「つもごり」も、古は「つごもり」なりけり。

「なりけり」の「けり」を現在にも用ふることありといへば、初學者は異様にも感ずべけれど、今の口語にも、失せしものを探し當てし時に、「ここにあつた」と過去

にいふは、實は、今現に有ることなりけり。

「あるけれど」の「けれど」は「美しけれど」の「けれど」にして、形容詞の語尾を動詞に續けたるなり。さるにても「ありけれど」は過去にして、「あるけれど」は現在なるも、奇なりといへば奇なり。

* まきもくの檜原
もいまだくもら
ねば、小松が原
に淡雪ぞふる。
(新古今集、大伴
家持)

「まきもくの檜原もいまだ曇らねば」は「曇らぬに」の義にて、「ゆゑに」といふ語も、萬葉集などには「なるもの」の義に屢用ひたり。されば同じ語も全く正反對なる意味をさへ表すことあり。かへすがへすも奇なるものは人間の「ことば」なりけり。

二七 門生に諭す

諸君の如きは春秋に富み、材力に足る、若し懈らずして日に學に進まば、何ぞ古人に及ばざるべき。然れども歲月は恃むに足らず、材力は多とするに足らず、ただ孜孜汲汲として勉めて息まざるにありぬべし。もし悠悠として日を涉り、一旦年老い、齡傾きて後、日頃の懈を思ひ出でて、いかに悔ゆとも何の益あるべき。即ち今、余が身の上にて候。されば古詩にも、

少壯不努力、老大徒傷悲。

(一)
名は潜。晉の詩人。一三五―一〇六

(二)
朱熹。宋の大儒。(一七九―一六〇)

(三)
晉人。陶淵明の曾祖父。

といひ、陶淵明も、

盛年不重來。一日難再晨。及時當勉勵。歲月不待人。

といへば、古人もこの感懐を同じうすとぞ見ゆる。こ

れ等の詩句、時時吟詠して勇進の氣を振ひ起すべし。

又世に傳ふる朱文公の勸學の文に、

勿謂今日不學而有來日。勿謂今年不學而有來年。

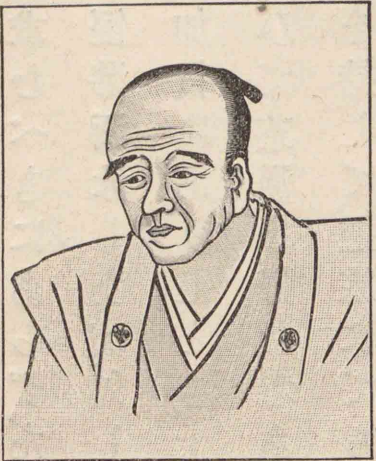
日月逝矣。歲不我延。嗚呼老矣。是誰之愆。

言簡にして意も明白なり。折節打誦して自ら警むる

によかるべし。それよりも余が常に愛するは陶侃が

語なり。

大禹聖人、乃惜寸陰。至於衆人、當惜分陰。豈可佚遊
荒廢、生無益於時、死無聞於後。是自棄也。



といへるこそ學者志を立つ

る法とすべきなれ。前にいへ

る淵明が詩も、曩祖以來の家

法にこそと思はる。凡そ人と

生れて學に志ありといふき

はの、生きて時に益なく、死して後に聞ゆることなく

草木と同じく朽ちはてんはいと口惜しかるべきこ

となり。されば諸君もこの陶侃が語をもて自ら激勵

して、日夜勤勉せらるべし。

但し學は勇進を喜ぶといへども、又急迫なるを嫌ふ。とかく一生ここを離れぬことなれば、急迫にして求むべきにあらず、ただ懈を戒めて常に聖賢の書に優游涵泳しなば、久しうして自ら進益あるべし。余昔加賀にありしとき、士族の中に紹鷗、利休(二)が風流を慕ひて茶湯を好む者あり。江戸に行役する時、道中茶具を持して、逆旅にても釜をかけ、炭をおきて、樂しみとしけるを、同行の人見て、いかに好けばとて、道中にてはやめよかし。といへば、その人いふは、道中とて一生

(二) 武野氏。利休の茶道の師。
(三) 千宗易。茶道千家流の祖。(三二一—三二五)

の外にあらばこそ、これも一生の日數の内なれば、わが茶湯をする日にあらずといふ事なし。家にあると何ぞ異ならん。とて、その後もやめざりき。學者の道に志すも、この人の茶湯を好むが如くなるべし。

(室鳩巢—駿臺雜話)

二八 服従と獨立

世間往往、獨立の尊ぶ可きを説くものあり。吾人も固よりこれに向つて異議あらず。されど其の謂はゆる獨立てふものは、動もすれば粗暴と取違へられ、無

紀律と誤解せられ、時としては、不従順の義と解せらるるに至るものがあるが如し。それ、教師の訓に違ふ生徒を以て、獨立の氣象ありと爲し、上官の命を奉ぜざる屬官を以て、獨立の精神ありと爲し、協同の約束に背く者を以て、獨立の骨頭ありと爲す。獨立果して斯くの如きものならば、吾人は之を唱道するの、決して世道を裨益する所以に非ざるを信ぜずんばならず。吾人の見る所にして、大過なからんには、獨立の精神は、服従の精神と同時に存在するを得るものなり。否、並立並行せざるべからざるものなり。切言すれば、

服従も獨立も其の實體は一にして、唯その觀察の方面を異にするに外ならざるなり。何となれば、獨立と謂ひ服従と謂ふも、畢竟我が意志の發表にして、獨立の氣象、中に鬱勃たるものに非ざるよりは、焉ぞ男らしき服従の徳を備ふるを得ん。

服従は卑屈に非ず。兵士が軍紀に服するは、長官の瞋を畏るるが爲にあらず、之に反すれば嚴罰に處せられんことを恐るるが爲に非ず、さりとして之に服して以て恩賞を邀へんとするに非ず。身一たび軍紀の下に赴く、心既に軍紀に服すべきを決したればなり。

嚴しく言へば、兵士が軍紀に服するは、自己の意志に向つて服従するなり。自己即ち自己に服従するなり。釋尊の唯我獨尊の義も決してこの外に出でざるべし。故に男らしき服従の消息は、獨立の精神を具有する人にして始めて之を了解すべきのみ。

獨立の假面を被りて、不從順の醜を掩ふものは、徳の賊なり。而して世間往往之を寬假するものあるは何ぞや。若し上官の命ずる所にして奉ずべからざるものあらば、其の道を以て之を争ふべきなり。然れども進んで斯くの如くする能はず、退いて其の命を奉

ずる能はず、面從腹非、徒に其の長官の命を沮格し、徒に其の長官を陰にて罵るが如きは、卑屈も亦甚しからずや。吾人は世の謂はゆる獨立てふものが、却て一種の外套を着けたる卑屈なるを見るを歎ぜずんばあらず。吾人は實に服従の美德なるを信ず。凡そ人と人とを繋ぐには必ず服従の鐵鎖無かるべからず。命令は上より下に及ぼす力にして、服従は下より上に奉ずる働たるが如く思ふは、未だ服従の何物たるを解せざるものなり。服従は必ずしも之に限らざるなり。吾人は相互の約束に服従する義務あるを忘るべ

からず。健全なる社會の市民は必ず服従の徳を有す。自治制度の完全なる運行は、殆ど専ら此の徳の存するに歸すべし。

吾人は實に服従の美德たるを信ず。凡そ人を其の良心に繋ぎ、人を天に繋ぐもの、一に之に頼らずんばあらず。吾人は、一度わが心に斯くすべし、斯く爲さざるべからずと定めたるものは、必ず之に服従する義務を遂げざるべからず。

服従は決して意志の自由を妨げず。人或は曰く、服従は即ち服従にして、最早選擇の自由と相容れず」と。

されど服従すべしと決定するは、即ち意志の自由なり。既に軍人たるを決す、軍紀に服せざるべからざるや論なし。既に官吏たり、官紀に服せざるべからざるや論なし。既に會社員たり、既に學校生徒たり、亦各、其の服すべき紀律あるや論なし。然れども彼等は之が爲に其の自由を失したるに非ず。彼等が選擇の自由は其の一身の職業を定むる時に在り。されど其の後たりとも、亦之を存せざるにはあらず。彼等は固より其の軍人となり、官吏となる時に於て、豫め決する所無かるべからず。されど彼等中途にして服従する能

はざるものあらば、即ち軍紀若しくは官紀と其の良心の命令と相容れざるものあらば、彼等は何時たりとも之を抛却して、其の紀律の檢束外に立つべきのみ。

故に服従の最後は、如何なる場合に於ても自己即ち自己に服従するなり。自己即ち自己に服従す、これ獨立の眞義なり。故に曰く、服従と獨立とは其の實體一にして、其の觀察の方面を異にしたるに過ぎずと。而して吾人は現代の我が國に於て、特に服従の美德なることを闡明する必要を感じずんばあらず。

(徳富蘇峯)

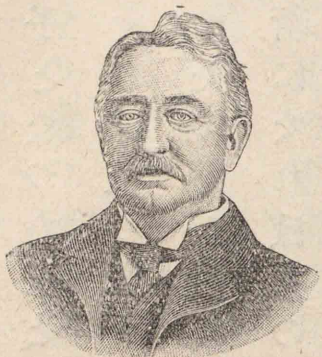
二九 意志の力

「意志の剛強なる人と急流とは自ら其の道を開く。」とは西洋の諺である。意志ある所、そこに光明がある。活力がある。男子一たび志を立てた以上、その成就を見るまでは、如何なる艱難が襲ひ來るとも、牢乎として揺がぬ磐石の如く、如何なる苦痛が迫るとも、卓然と聳ゆる大木のやうな堅忍不拔の心、これが意志の力である。人生の行路には様様の誘惑がある、幾多の

障碍がある。その誘惑に打克つ克己心、その障碍を打破つて進む勇猛心、皆是意志の力である。世に成功者と稱せられ、或は偉人と稱せられる人達が、世路の難嶮を突破し來つた跡をうかがへば、總て彼等の意志の力の如何に強きかを示さぬものはない。

人は五十年の壽命を以て千年の計を憂ふるものである。その五十年の壽命をも完うし、事業を成就せんには、健康が第一の要素である事はいふまでもないが、その健康すらも、大部分、意志の力で左右せられるものである、といふ事を忘れてはならぬ。

* Cecil Rhodes.
(1853-1902)



セシル・ロッド

今から十數年以前に死んだ英國南阿の首相セシル・ロッド氏は、十八歳の時、大學在學中に肺病に罹つた。醫師は不治の難症だと宣告し、彼自身も、一時は殆ど人生に絶望したが、強い強い彼の意志は、この間にも無限の活力を湧起せしめた。彼は學校を退き、奮然起つて南亞弗利加の蕃地に赴き、其處に病を養ひながら、吾が生命を托すべき何事かの事業を發見せんとしたのである。

窮屈な學窓から脱け出でて、廣漠たる南阿の天地

に身を投出したる彼は、まるで生れ變つた心持になつた。彼は放たれたる鳥の如く、荒野の大氣を呼吸し、椰子の葉蔭に身を包まれて、清新快活なる大宇宙の子となつた。友とするものは一卷の聖書のみ、しかもそれに依つて天涯孤客の慰安を得るには十分であつた。境遇が變り、生活が變り、見るもの、聞くもの悉く新になれば、人の身は自ら生れ更つたやうにならざるを得ない。かくて病は數年ならずして癒え、體質は一變して、土人にも劣らぬ頑丈なものとなつたのである。

(一) Kimberley.

(二) Cape Colony.

その間に、彼は一大事業をも發見した。それはキムバレーといふ不毛の地に、千古空しく鎖されてゐた無限の寶庫、金剛石坑の開掘である。彼は萬難を排して此の事業に従ひ、忽にして一大成功を贏ち得て、巨萬の富を積み、偉大な名聲を得た。かくて三十三歳にしてケー^(三)プ殖民地の議員に選ばれ、一躍して首相となり、遂に南阿戰爭を起して、南亞弗利加をして英國の勢力範圍たらしめた。

彼は千九百二年、五十歳で世を去つたが、其の半生が頗る强健で、精力絶倫であつた事は、その成し遂げ

*Matabeleland.

た事業を見ても知られる。永年彼の秘書役を勤めてゐたフィリップ・ブジョルダン氏は、彼の私生涯を記して、「ローツ氏は異常な事業的才能を有し、一度重要な事に對すれば、不眠不休、良成績を擧ぐる迄は已まなかつた。氏は他の優れた人人が五人で完成する事業を、一人で爲し得る非凡の頭腦を有してゐた。」と記してゐる。且つ南阿戰爭の際の如きは、熱沙の曠原に野營して、數日間、^{*}マタベル蕃族と對峙し得たのである。氏は實に南阿大英會社、デビヤス合同金鑛會社、南阿合同大金鑛會社等の専務理事であると共に、南阿

大陸電信の建設中の難問題を解決し、兼ねて巨大なる農園・果樹園を經營し、他面には、政事家として千八百九十年より七年間、ケープ殖民地の首相となり、首相辭職後は、進歩黨の首領として該黨を總理した。斯く許多の大事業の爲に、毎日平均五十通からの手紙に接したが、大抵は自ら披見した。而も英雄の胸中自ら閑日月がある。彼は埃及・土耳其・伊太利の各地に遊び、又日本の風光にも憬れてゐたといふ事である。

彼の遺した巨萬の財産は、その遺言に依り、「セシル

ロイツ獎學資金となつて、彼の生命を傳へ、彼の經營した南阿の一角は、大英帝國無上の寶庫として、英國今日の富を供給する一大要素となつて居るのだ。

セシルロイツの半生の如きは、意志の力がよく健康を左右し得べく、且つ人間の活力の殆ど無限であることを示してゐるではないか。（近世立志編に據る）

修訂新撰國語讀本 卷四終

修訂新撰國語讀本（全十冊）

定價	卷一、二 各金參拾六錢	大臨	卷一、二 各金四拾壹錢
卷三、四 各金參拾壹錢	正時	卷三、四 各金參拾六錢	
卷五より各金貳拾九錢	年度	卷五より各金參拾參錢	

大正三年十二月四日 改訂再版印刷
 大正六年十月二十三日 修訂印刷
 大正七年一月十日 修訂再版印刷
 大正七年一月十四日 修訂再版發行

著者 佐々政一

東京市小石川區大塚窪町八番地

發行者 株式會社 明治書院

取締役社長 三樹一平

東京市神田區美土代町二丁目一番地

印刷者 島連太郎



發行所

東京市神田區錦町一丁目
 振替口座東京四九九一

株式會社 明治書院

長電話本局二三九八番

